

拝啓 暑中お見舞い申し上げます。

今年も早や7月末となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、むくげの花が咲いております。我が家の玄関先では、プランターに植えたペチュニア、サフィニア、日日草、朝顔が元気良く咲いており、郵便配達や新聞配達の人に喜んで頂いていると思います。

今回は、内村鑑三先生の『続一日一生』からの引用の4回目です。

4月22日のところに「クリスチャンが神の子であるのは、キリストが神の子だからである。クリスチャンがよみがえるは、キリストがよみがえりたもうたからである。クリスチャンに永生があるは、キリストにそれがあるからである。」とありますが、その今も生きておられるイエス・キリストを、小西先生は、称名によって受ける、自分の心に来ていただくというわけです。「常住坐臥時節の久近を問わず、称名せよ」と称名を勧められるわけです。

南原シンポジウム第12冊目の記録の本『南原繁と戦争』が出来上がり、7月12日に我が家で編集者の西原賢太郎さんと南原研究会の鈴木英雄さんと共に封筒詰め、宛名貼りをし、夕方クロネコヤマトのDM便で発送しました。

今回は、加藤陽子先生の「南原繁と太平洋戦争——日中戦争・太平洋戦争を中心に——」が、皆さんに感銘を与えているのはわかるとして、私の書いた「do the nearest duty について」という文章も、多くの人に受け入れて頂いたようです。考えてみると、南原先生も、内村先生も、新渡戸先生も、小西先生も、石館守三先生も皆さん、do the nearest duty の精神でやってこられたと言えるかもしれません。

鴨下重彦先生が、亡くなる1週間前の南原シンポジウムの講演で、言われたことは、「志を立てよう」ということでした。最近何度目かを読み始めた松下幸之助さんの『道を開く』という超ベストセラーの本の冒頭には、次のように書かれてあり、感動しました。

「志を立てよう

志を立てよう。本気になって、真剣に志を立てよう。生命をかけるほどの思いで志を立てよう。志を立てれば、事はもはや半ばは達せられたとあってよい。志を立てるのに、老いも若きもない。そして志あるところ、老いも若きも道は必ず開けるのである。… 志を立てよう。自分のためにも、他人のためにも、そしてお互いの国、日本のためにも。」

暑い日が続きますが、皆様もどうかお身体ご自愛のうえ、お過ごしください。

敬具

平成28年7月27日

山口周三

エンカウンターのご読者各位

追伸 7月の月末旅行の予定があるため、少し早めにお送りします。

追伸 7月の月末旅行の予定があるため、少し早めにお送りします。